

1. センター概要

和歌山大学では、2004年5月に、大学の知的資源を最大限に活用し、自治体等と連携しながら地域防災力の向上を推進する和歌山大学防災研究教育プロジェクトを教職員の有志により立ち上げた。プロジェクト発足から6年の活動実績を踏まえ、2010年4月に防災研究教育センターが設置された。さらに2016年4月に更なる発展を目指して防災研究教育センターと宇宙教育研究所とを合併し、災害科学教育科学研究センターが設置され、その後、防災研究教育センターが設置されてからちょうど10年目の2020年4月に災害科学・レジリエンス共創センターとして新たに活動を開始した。その後、宇宙教育に関する機能が2023年10月に「宇宙教育研究センター（仮称）」設置準備室として分離され、以降は4つの分野で活動を展開している。これまでの沿革を表1に示す。

2. センターの活動内容

2. 1 レジリエンスと共創

災害科学・レジリエンス共創センターは、自然災害及びその被害の軽減に関する研究を行うとともに、研究成果を社会に還元・実装するとともに、減災活動に係る人材の養成や地域連携を通じて地域防災力の向上に寄与することを目的としている（和歌山大学紀伊半島価値共創基幹災害科学・レジリエンス共創センター規則）。ここでキーワードとなるのは、「レジリエンス」と「共創」である。

レジリエンス（resilience）とは、復元力、回復力、弾力性などの意味を有する単語である。例えばコンクリートのような頑健なものは外力に対して対抗することが可能であるが、限界を超えると脆く崩れてしまう。それに対して、ゴムのような弾力性を有するものは、外力を受け止めて変形するが、外力が無くなると元の形に戻ろうとする。このような振る舞いを発災により被る被災地の被害の度合いと重ね合わせ、災害を受け止めつつも、災害後に速やかに復旧・復興を進める力をレジリエンスという。災害をしなやかに受け流し、速やかに元の状態に戻ることが可能な地域の防災力向上が重要な課題である。

また、地域に根差した大学として、研究成果を社会に還元・実装するためには、大学単独で進められるものではなく、地域のステークホルダーと連携を図りながら共に創りあげていく「共創」が重要である。

当センターでは、この二つのキーワードによる考え方を基に、防災・減災に関わる教育・研究活動に取り組んでいる。

2. 2 活動分野

災害科学・レジリエンス共創センターでは、現在、大きく以下の4つのテーマを掲げて活動を進めている。

(1) 観光地防災の社会実装研究

観光立県を掲げる和歌山県においては、観光地、観光客を対象とした防災・減災も重要な課題である。その社会実装に向けた取組を進めている。

(2) 防災・減災・復興の担い手づくり

防災・減災の活動を持続するためには、担い手の継続的な確保が重要である。防災・減災教育の充実や、学生・教職員のボランティア活動への理解促進に向けて取り組んでいる。

(3) 防災を通じた産業イノベーション

防災・減災の取り組みを、災害に備え、災害時のみに活かすのではなく、防災・減災を立脚点とした新たな産業の展開に向けた検討を進めている。

(4) 和歌山大学の更なる防災力強化

大規模災害時には和歌山大学も被災する可能性がある。大学が被災することを前提に、どのように対応すべきか、大学の防災力強化について検討を進めている。

2. 3 2025年度の活動内容

前述の各テーマで以下のような活動を行った。

(1) 観光地防災の社会実装研究

鉄道事業者との津波避難訓練の共創や、防災ジオツアーの社会実装に取り組んだ。

- ・鉄道津波対策・観光地防災研究プロジェクト

(2) 防災・減災・復興の担い手づくり

和歌山大学の学生はもちろんのこと、教職員、さらには地元の住民の方々も含めて、防災・減災の担い手となる人材を増やすべく、各種取組を実施した。また、災害ボランティアステーション「むすぼら」を中心とした活動を展開した。加えて、2025年度には、センターとして初めて公開講座を開催し、地域住民とともに災害と地域のあり方について考える機会を設けた。

- ・災害ボランティアステーションむすぼら
- ・住民への防災意識を高めるための災害前の自治体の災害対応
- ・災害時における情報ボランティア養成プログラムの教育コンテンツ開発
- ・南紀熊野ジオパークと連携した防災教育
- ・住民と行政を繋ぐ事前復興まちづくり
- ・防災士養成プログラム（学生向け）
- ・防災士養成講座（一般向け）
- ・公開講座

(3) 和歌山大学の更なる防災力強化

和歌山県が被災地となる状況で、和歌山大学が地域でどのように活動すべきか、また、大学自体の防災力をどのように強化していくべきかについての具体的検討を進めた。

以上の詳細な報告については、以降のプロジェクト報告の部を参照願いたい。